

アナログ的な臨床的勘所を客観的にまとめた1冊

「エビデンスに基づく総義歯製作」を 読んで

客観的に総義歯製作の 基準を見る

これまでも総義歯製作法に関する書籍は数多く出版されており、その方法やポイントは執筆者により様々であると共に、独自の表現方法で語られていることが多いと思われる。しかしながら、総義歯製作の術式の中に書かれている重要なポイントの多くは、共通しているようにも感じられる。

本書を執筆した佐藤幸司先生は臨床的洞察力が鋭く、患者のあらゆる状態を客観的に表現することができる数少ない歯科技工士だと思われる。筆者の教室の非常勤講師であり毎年講義を拝聴しているが、年を重ねる度に、その表現力にはエビデンスの構築に拍車がかかっていることを実感していた。従来の総義歯に関する書籍には、エビデンスとして表現された書籍はほとんどなかったと筆者は認識しているが、文献的な背景を示してエビデンスを整理したという点が、本書の特徴的な点ではないだろうか。

動画でも見る臨床テクニック

内容を見ると、冒頭にある無歯顎者の骨格パターンや顎堤条件に合わせて行った骨格パターンⅠ級、Ⅱ級、Ⅲ級の人工歯排列から、大きな衝撃を受けることは間違いない。どの患者も画一的に排列する教科書的なものとは、臨床的な排列は全く異なることが理解できると思う。極めて臨床的な観察力と客観性から創造されたものと推測できる。

次のPart1の動画から学ぶ臨床技工テクニックの数々には、目を見張るものがある。これまでの文字による記載や平面図による技工テクニックの紹介に留まらず、動画として提供できる洗練された技工技術にも本書の企画の素晴らしさを感じてしまう(①)。

Part2では、本書のメインである客観的生体情報をふんだんに盛り込んだ総義歯製作法が示されている。特に前歯部人工歯と臼歯部人工歯の排列基準においては、模型から得られる生体情報を客観的情報に変換し、人工歯の排



■佐藤幸司 著
■A4 変判 80 頁
■定価：5,400 円＋税
■医歯薬出版株式会社 刊

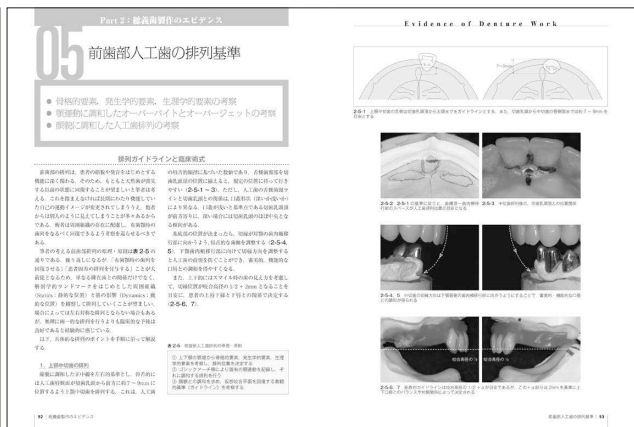
列を行う極めてデジタル化に近い手法となっている(②)。

これまでのアナログ技術をデジタル技術に移植していく重要な橋渡しとして、この書籍は極めて重要な、かつ歴史的な一冊になることは間違いないと確信している。本書の副題にもあるように患者の生体情報を考慮した客観的な義歯製作法として集約し、一人でも多くの臨床経験豊富な歯科技工士のスキルのデジタル化により、近い将来の“デジタル歯科技工設計士”としての新たな職の創造につながることを期待する。

(神奈川歯科大学全身管理歯科学講座顎咬合機能回復補綴医学分野教授/玉置勝司)



①同書 Part1 より (14 ~ 15 頁)



②同書 Part2 より (52 ~ 53 頁)